

## 降〈くだ〉りが淵〈ふち〉の河童〈かっぱ〉（兵庫区淡河町）

それは遠い遠いむかしのことでありました。

あるところに、とってもよく働く百姓熱心なだんながいて、それはそれは、広い田んぼや畑がたくさんあるのに、明けても暮れても年がら年中、きのうは東の畑へ草刈りにいき、きょうは西の田へ行き、まい日のように田をたがやし続けていました。

やがて梅雨〈つゆ〉がきて、広い田んぼもすっかり植えつけが終り、若苗をわたってくる心地よい風が吹くころは、だんなはもう田の草取りにかかっていたいました。じゃぶんこ、じゃぶんこ。



一かぶは一合

二かぶは二合

三かぶで三合

だんなは、くる日もくる日も稲の根元をくまでで、じゃぶんこ、じゃぶん、とたがやしていきました。

一番草、二番草も早くすみ、三回目の草取りをするころは、気が遠くなるような土用の炎天〈えんてん〉。それでもだんなは、一かぶは一合、二かぶで二合と、お米の計算をくり返しながらか取りに夢中でした。

その時、だれかが田の畦〈あぜ〉から声をかけました。だんなは、やっと背をのぼしてふりかえりました。

田の畦〈あぜ〉には、汗にまみれた小さな男が立っていました。おそらく「降〈くだ〉りが淵〈ふち〉」の急な坂を登ってきたのでしょう。子どものような背丈なのに、陽やけた顔はだいが年をとったような大人です。浅黒い押しつぶしたような顔に、口だけが突き出しています。

「何か用かのうー。」

だんなは手の泥をうちはらいながら、もどかしそうにききました。

「だんな、おら、旅のもんだが草取りを手つだうから、一晚泊〈と〉めてくれんかのう。」

「へえー。草取りができるんかい。そんならやってみい。」

だんなの声が終らぬうちに、もうその男は稲田の中へしゃがんで草取りをしていました。

なんと、その草取りの早いこと、まるで泳ぐようにだんなの前を遠ざかっていきます。あまり早いので、だんなはその男のあとをみましたが、草一本ものこっていません。

「なんと草取りの上手な男だろう。」

あまり早いのでついていけないだんなは、汗をぬぐいながらあきれはてて、ただぼうーと田の中につ立っておりました。

夕暮れに家へかえるとその男は、風呂の水くみから庭そうじ、牛飼〈か〉いまで、あっというまにすましてしまいました。

「なあ、旅のものといったが、どこまでいかしやんすだ。」

夕食後、だんながききました。

「どこというあてもないだよ。ただどこかに、よいだんながあれば奉公〈ほうこう〉したいんだよ。」

だんなは、なみなみとついだお茶をすすめながら、

「どうだ、うちにおってくれんかのう。銭〈ぜに〉はお前の仕事ぶりを見込んで、しっかりはりこむぜ。」

「たのみますだよ、だんなさま。私も気に入りました。せいーばい働きますだ。」

その翌日からは、その男は暗いうちからはね起き、夜暗くなるまで働きました。仕事がなくなると近所へ仕事をたのまれていきました。その仕事の上手で早いこと。村の人びとは、みなほめぬ人はありませんでした。

そして、二年だやら三年だやら暮れたころでした。村の人びとの口から、へんなうわさが流れました。

「なあー。あの下男はどうも人間じゃなげ。きっと河童〈かっぱ〉の河太郎〈かわたろう〉だぜ。かわいそうにあのだんな、いつかは尻から生血をすわれて、あの下男に殺されてしまうよ。」

そんなうわさが回り回って、だんなの耳へ入りました。

「そういえばあの男、いくら暑くても肌〈はだ〉をぬがぬ。なぜか背中を見せぬ。きっと背中に甲羅〈こうら〉を背負っているんだろう。そうだ、それにちがいない。」

「そうだ。もし河童だったらおがら（あさの皮をはぎとった茎〈くき〉）の箸〈はし〉で食べたなら死ぬというではないか。一つためしてみよう。」

その夜は、家族中おがらの箸で食事をする事になりました。

「だんなさま、この箸はおがらじゃないですか。」

いぶかしげに見つめる下男へ、

「桐〈きり〉の箸だよ、かるいだろう。」

「桐ですかねえー。」

半信半疑〈はんしんはんぎ〉で食べ終わった下男は、その翌朝かわいそうに冷たくなって死んでいました。

「たいへんなことをしてしまった。あんなに働いてくれた河童を殺すなんて、いくら悲しんでも死んだ河童はかえってこない。」

だんなは盛大な葬式〈そうしき〉をしてやり、「降りが淵」に石碑〈せきひ〉をたててねんごろにまつりました。

その後だんなの家は、代代お盆の日は家内中おがらの箸で食事をし、河童の冥福を祈っているということです。

